バスケットボールプラザ

Basketball Plaza *No.102*

2025 年 5 月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

第3回シニアバスケットボール交歓大会 in Shirako

期日：2025年4月23日(水)、24日(木)　　場所：Ｈニューオーツカ専用アリーナ

<参加の皆さん>

富士山静岡フリーダム・シニアギャロップの皆さん

ブラックパンサー・岩手マスターズの皆さん

駄馬・CELIACS 酒飲み仲間の皆さん

SOS・有志チームの皆さん

横浜＆草加レジェンド・Tigre＆レイダーズの皆さん

参加チーム（順不動）

- ○シニアギャロップス
- ○富士山静岡フリーダム
- ○駄馬
- ○横浜＆草加レジェンド
- ○STARS OF STARS（SOS）
- ○岩手マスターズ
- ○Tigre ＆ レイダーズ
- ○ブラックパンサー
- ○CELIACS 酒飲み仲間

目　　次

○ 令和６年度活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・事務局・・・　２
○ 令和７年度事業活動計画（令和７年６月起案）・・・・・・・・・・・・事務局・・・　３
○ 令和６年　秋季講演会講演録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・事務局・・・　４
○ 第３回シニアバスケットボール交歓大会　in Shirakoを振り返り・・普及部・・・　７
○ 「アジアバスケットボールシニアカップ2024」観戦報告・・・・・・普及部・・・　８
○ 最近の我が国バスケットボール界の動向　・・・・・・・・・・・・・・普及部・・・１０
○ 秋田県バスケットボールのあけぼの　・・・・・・・・・・・・・・・・ 歴史部・・・１３
　－秋田県のバスケットボール普及のながれ－
○ 高校籠球ふるさと記（秋田県編）　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 歴史部・・・１５
○ 【人物抄】 薬師寺　尊正　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・歴史部・・・２３
　バスケットボール黎明期における功績
○ 書籍紹介　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・蒲田　尚史・・・２５
　谷釜尋徳氏著書『バスケットボール秘史』を読んで
○ 会員だより　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田中　三夫・・・２６
　九州地区（沖縄県を含む）シニアバスケットボールのあゆみ
○ 会員だより　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・辻　尚志・・・２８
　「エンジョイクォーター」誕生秘話
○ 会員だより　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川戸　政角・・・３０
　WORLD MASTERS GAMES 台北大会に参加　諦めかけていたメダルを獲得
○ 会員だより　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・須田　武志・・・３２
　嘘のような、本当にあった話（その９～）
○ 訃報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
　油井康さんを偲んで　（小澤正博）　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
　尾崎正敏さんを偲んで（蒲田尚史）　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
○ 事務局だより　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・事務局・・・３８
○ プラザ　こぼればなし　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９

令和６年度活動報告

（2024 年４月～2025 年３月）

［事務局］

＜令和６年度＞

2024 年

４ 月 ５日　　関東ゴールデンシニアバスケットボール連盟打合せ出席
４ 月 20、21 日　シニアバスケットボール交歓大会 in 白子　開催
　　男子 70 歳以上チーム　９チーム参加
６ 月　　監査・理事会「令和６年度通常総会資料」（案）を審議・承認
　　「令和６年度通常総会資料」（案）発送はがきによる賛否
７ 月 14 日　　中学生初心者クリニック　５年ぶりに世田谷学園にて開催
　　男子 12 校/96 名・女子 11 校/89 名　・合計 185 名参加
７ 月 24 日　　通常総会開催　於　コンフォート水道橋
７ 月 末　　「バスケットボールプラザ 100 号」　発行
９ 月 ２日　　共同新聞社から天皇杯 100 回記念大会について取材を受ける。
９ 月 ７日　　第 30 回　北海道全道大会（札幌）　訪問
９ 月 27 日　　能代バスケットボールミュージアム　訪問
10 月 23 日　　「検討委員会」　開催
10 月 31 日～　　シニアバスケットボール交歓大会 in 代々木　開催
11 月 １日　　男子 60 歳以上/８チーム、女子 50 歳以上/３チーム、　合計 11 チーム参加
12 月６～８日　　アジアシニアカップ 2024（タイ・バンコク開催）　訪問
12 月 13 日　　理事会・講演会・懇親会開催　於　コンフォート水道橋
12 月 末　　「バスケットボールプラザ 101 号」　発行

2025 年

１月 20 日　　「検討委員会」　開催
２月 ４日　　渡邊・蒲田、堀内氏（元日本協会・事務局）３名で公益財団法人日本バスケットボール協会の事務所を訪問。
　　渡辺事務総長・荒牧広報担当と面談。当会の活動の内容の説明と、日本協会 100 周年に向けての記録の整理などに協力するとの申し出を行った。
３月 10 日　　「検討委員会」　開催
３月 25 日　　渋谷センター街「第 18 回安全・安心まちづくり研修会」　出席

以上

令和７年度事業活動計画（令和７年６月起案）

［事務局］

１．日本バスケットボール協会への協力と提言
２．バスケットボール競技団体への協力・支援
３．日本のバスケットボールの歴史の調査研究と資料の収集
４．組織の充実と財政の確立
５．会員相互の交流を計画

<table>
<tr><th></th><th>事業内容</th><th>具体的内容</th></tr>
<tr><td>編集</td><td>1.会報「バスケットボールプラザ」の発行

２．HPの活用</td><td>①発行時期と主な掲載記事
<table>
<tr><th>№</th><th>発行時期</th><th>主な掲載記事</th></tr>
<tr><td>102</td><td>令和７年
６月</td><td>令和６年度活動報告、令和７年度事業活動計画（案）、白子大会報告、Ｂリーグ・Ｗリーグ結果報告、「高校籠球ふるさと記」（秋田県編）、会員だより、など</td></tr>
<tr><td>103</td><td>令和７年
12月</td><td>「先人の軌跡」「神田バスケットボール資料室」、代々木大会報告「高校籠球ふるさと記」（東京都編）、会員だより、など</td></tr>
<tr><td></td><td>令和７年</td><td>バスケットボールプラザの発行と同時に大会報告など内容を選択しHPに掲載する。</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>普及</td><td>1.シニア大会の開催と拡大

２．その他</td><td>①シニアバスケットボール交歓大会を令和７年４月 23 日・24 日、千葉県長生郡白子町で開催、参加資格：70 歳以上
②第 16 回シニアバスケットボール交歓大会を令和７年 10 月 29 日、30 日に「代々木第二体育館」にて開催、参加資格：男子 60 歳以上、女子 50 歳以上
③中学生初心者向けクリニック(世田谷区)開催</td></tr>
<tr><td>歴史</td><td>1.歴史的データの収集と整理</td><td>①日本バスケットボールの歴史的資料のアウトプットの具体的方法を検討
②神田バスケットボール資料室の資料公開と閲覧の実施
③JBA100 周年の歴史のトピックスを整理する。</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td>1.振興会活動の運営の支援と効率化を計る</td><td>①理事会、総会、講演会等の事務連絡及び振興会の活動の円滑化を図る。
②「神田バスケットボール資料室」の充実努力
③地方協会の「プラザ購読一部負担金」増加を計る。
④ホームページなどによる情報発信を積極的に実行する。</td></tr>
</table>

実績（５月末時点）
● シニアバスケット交歓大会 in 白子（９チーム参加）　開催　４月 23～24 日
●「一般社団法人京都府バスケットボール協会設立百周年記念祝賀会」　出席　５月 18 日
●「検討委員会」 開催　５月 13 日、５月 27 日　以上

令和６年　秋季講演会講演録

［事務局］

日　時　令和６年 12 月 13 日（金）14：00～15：30
場　所　コンフォート水道橋　５階　会議室Ｆ
講　師　橋本信雄さん

〈講師紹介〉
　一般社団法人東京都バスケットボール協会会長、Wリーグ副会長、FIBA コミッショナー、公益財団法人日本バスケットボール協会　元審判部長・元国際部長

　橋本さんは、日本協会の審判部長、国際部長などを歴任、FIBA 審判員、FIBA コミッショナー、FIBA-Asia 審判指導者として活躍され、現在も東京都協会会長、Wリーグ副会長を務め、長く国内・国際バスケット界の第一戦で活躍されています。
　橋本さんには、自己紹介に続いて本日の講演の内容について現在のバスケット界の三項目についてお話ししていただきました。

〈講演要約〉

● 映像の普及とバスケットボールの発展について
　現在、Bリーグ、Wリーグ、国内主要大会等、多くの試合をソフトバンクさんの「バスケットボール LIVE」（有料）に加入すれば誰でも見ることができ、多くのバスケットボールファンの増加等、素晴らしい影響を感じています。現場サイドもチームのテクニカルスタッフが映像を分析し、コーチ・選手に情報を伝達して作戦面でサポートし、戦術・戦略に生かすことが可能になりました。
　現在、B1、Wリーグでは「IRS（映像判定システム）導入」により試合中に審判が判定に疑問が生じた場合、映像を確認することにより正確な判断を下すことができるようになりました。ヘッドコーチからも試合中の判定に疑問が生じた場合、「ヘッドコーチ・チャレン

ジ」として条件付きではありますが、審判に映像の確認を要求して正しい判定の情報を得る権利が出来ました。この状況は現場のチーム関係者、観客のみならず、映像で試合を観戦している視聴者にも「正しい情報を与えることにより、正しい状況判断の共有が出来る」ようになりました。今後も映像の普及が新しいバスケットボールの戦術・戦略に影響し、個々の選手にとってもプレイの修正や技術の進歩に役立てるようになると思います。

私が長く関わってきた審判の世界でも、自分が次に担当する試合のチームのスカウティングを綿密に行える環境になり、試合後もその試合における判定やポジショニング、コミュニケーションなどを一緒に担当した審判と分析することが日常的になっています。国内トップリーグのみならず、各都道府県の各大会においても、映像によるスカウティングやレビューが日常的なルーティーンになっていることは、私の現役時代にはあり得なかったことです。テーブルオフィシャルズの方々も映像を有効的に活用して、各コーチのタイムアウトを請求するタイミングや癖の確認や担当した試合の選手交代が正しく行われていたか、合図のタイミングや表現が適切であったかのレビューに映像を活用しています。コーチも映像を分析する技術と映像を活用して指導する能力が求められる時代になり、「映像分析を専門に行う人材」のみならず「英語で直接外国人選手に映像を見せながら説明や指導ができる人材」など育成していく必要があります。

私が長年関わってきたＷリーグでは、女子日本代表の活躍とリーグの繁栄は「両輪」の関係にあり、オリンピックに必ず出場し、良い結果を残すことが重要であると考えております。東京オリンピックの「銀メダル」は歴史的快挙でありますが、将来に向けての次世代の選手の強化育成が喫緊の命題となっています。日本の女子チームの強いチームディフェンス、スピード、３ポイントシュートのスタイルも世界の多くの国から研究されてきており、長身選手を保有しつつ日本のスタイルを踏襲する国も出てきています。

アジア・世界のライバル中国では現在、２m20㎝の若くて走れる選手が脅威になっています。中国にはその選手以外にも２mかつ体に厚みのある選手が数名いて、場面によっては躊躇せず 3P シュートを打ってくる難しいチームになっています。身近のライバルの中国にいかに勝つか、今後の代表活動に期待しています。

Wリーグでは企業チームとクラブチームが混在しており、活動環境もさまざまでありますが、企業やスポンサーの支援は本当に貴重であり生命線です。選手たちが思う存分バスケットボールに打ち込める環境の整備もこの先のリーグに課された宿題であると捉えています。

男子代表に目を向けると、近年、NBA で活躍する選手も現れ、国内のBリーグの発展もありレベルが上昇しています。海外からもBリーグのレベルや運営能力の評価が高まり、Bリーグでプレイを希望する有力外国人選手も増えていると感じます。そのような選手と国内でプレイできる環境も非常に貴重と思いますし、若年層の選手にとって良い目標が出来たと思います。

ファンにとってもバスケットボールは天候に左右されない、時間設定が計算できる、プレイ以外のエンターテイメントも楽しめるといった野球･サッカー等の「グラウンド競技」には無い要素もあり、この先もまだまだ「伸びしろ」が見込めるスポーツだと思います。

以上、いろいろなお話をさせて頂きましたが、映像環境の発展、国内男女各リーグの発展が今後も日本のバスケットボール発展のキーになると確信しております。

● 都道府県協会の運営の難しさについて

都道府県協会は運営において大きい事業の一つである国スポ（従来の国体）の強化活動費や派遣費などの収支に苦慮しています。助成金などですべて賄うことも困難で、協会としても限られた予算の中でいかに強化を継続するか大きな課題であります。都道府県協会も協賛獲得や登録者数増加も重要なミッションだと思います。近年ではアンダーカテゴリーの「暴言・暴力の問題」がなかなか改善せず深刻化しています。若年層を指導する指導者のみならず父母への「インテグリティ啓蒙活動」も協会に課された永遠の課題と思われます。

● 海外での経験について

日本の審判員は国際的レベルにあり、パリ・オリンピックでは女子のセミファイナルを日本人審判員が担当しました。過去にもオリンピックでメダルゲームを任された審判も数多くおり、これからも世界で活躍する日本人国際審判の増加を期待しています。

現在、「国際競技規則書（ルールブック）」においても、IRS（映像判定システム）に関わる項目が増え、この先、映像判定する場面も増えると思われますし、AI の技術がバスケットボール競技の判定に進出する日も遠くないのではと個人的に想像しています。観客や映像視聴者への「現場の判定と映像が提供する真実の一致」が益々求められる時代になると思います。

バスケットボールは得点が多く入る競技です。今後も攻撃重視のアグレッシブなプレイが好まれる傾向になり、守備側はよりプレッシャーや負荷がかかると予想されます。しかしながら、「映像や理屈でないものが勝負を決める」ことも時にはあると思います。そのようなバスケットボールを皆様もこれからも応援していただくと共に末永く楽しんでいただければ幸いです。本日はこのような貴重な場を頂き誠にありがとうございました。

【付記】

その他、国際審判員・国際コミッショナー、日本協会の国際部長など約 35 年間の国際活動経験談を面白く裏話を交えてお話していただきました。

以上

第３回シニアバスケットボール交歓大会　in Shirako
を振り返り

［普及部］

例年は土日の予定を組んでおりましたが、70 歳以上の大会ということもあり、事前アンケートを実施し集計したところ、平日希望が多数でしたので、今年は 2025 年４月 23 日（水）、24 日（木）に行いました。

４月の平日ということもあり、ホテルとのやりとりはスムーズでした。

参加者からいただいた感想として、移動が便利だったとのお声がありました。ただ、東京エリアから参加いただいた方からは通勤ラッシュに巻き込まれたというお話しを伺いました。とはいえ、総じて、平日の方が休日に比べ、集合が楽だったとのお声をいただきました。

また今回、試合時間はそのままに次の試合との間の時間を短縮したことで、1 日目で 30 分開催を遅らせることができ、２日目は 90 分早めに解散することができました。
大会自体の進行は皆様が積極的にテーブルオフィシャルや試合進行に協力的でしたので、進行を任されている私としては助かりました。
皆様のプレイに関しては、前回までは 1 日目より２日目の方が動けていると感じたのですが、今回は 1 日目の方が動けていたように感じました。

1 日目の試合終了後に代表者会議を行い、皆様のご意見をいただきました。今後の大会運営に役立てていきたいと思います。

以上

（大会実行委員長　高橋 旭）

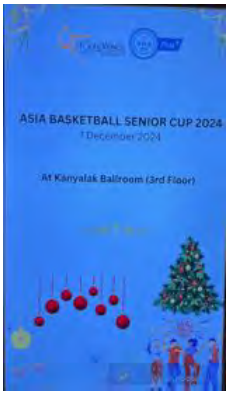
「アジアバスケットボールシニアカップ2024」観戦報告

～ シニアチームがバンコクに集まる ～

［普及部］

昨 2024 年 12 月７日にアジア地域で活動しているシニアバスケットボールチームがバンコク（タイ）に集合し、「アジアバスケットボールシニアカップ2024」を開催した。

（チームはアジアの各地に駐在の日本人が中核をなして形成され、本会員鈴木承二さんが 2019 年 10 月の大会をプラザ 85 号（2020 年２月）で報告している。）



ホテル内のポスター

当日は、ホテルのフロントに午前６時集合、大型バス５台に分乗して市内の会場となる大学（Churalongkorn University Sports Center）に向かって出発した。午前７時に全チーム（上海・広州・蘇州・ハノイ・ホーチミン・マニラ・バンコク・クアラルンプール・ジャカルタなど 40 歳以上のシニアチーム 11 チーム、48 歳以上のスーパーシニアチーム８チーム）が体育館に集合して開会式を開催。大会要項などの説明があったのち、30 分後に試合が始まった。

この大会は、40 歳以上のチームと 48 歳以上のチームで構成され、女子の単独チームも交じりトーナメントを行い、ランキングを決める方式で、決勝戦までは４試合を行う必要がある。審判は３人、T.O.も含めてすべて地元バンコクの役員が担当し、試合は７分クォーター、フリースローの時間帯を流しで、ハーフタイムは２分、タイムアウトは後半１回のみ、但し4Q最終の１分間のみ時間を止めるルール。従って１試合は、40 分間から 45 分程度で終了することになる。

48 歳以上の選手の中には合計で７試合に参加した選手もいた。エアコンの効いた２面の体育館とオープンの体育館１面を使用、昼食をゆっくりとる余裕もなく、目まぐるしく試合が進行したが、最終の順位を決める試合はすべて熱の入った白熱した試合となった。順位決定戦が終わり、全員が観戦、最終の決勝戦も無事終了し、大学体育館を午後３時 30 分頃出発しホテルに戻った。

午後７時から表彰式とクリスマスと懇親会が行われ、ベトナムチームの進行でMVP、ベスト５、優勝チームの表彰と次回の大会の担当チームのくじ引きなど盛りだくさんの趣向があった。

アジアで働いているパワーのあるシニアバスケットボールの皆さんがバンコクに集まり、朝から夜まで忙しく楽しく過ごす１日であり、次回もバンコクで開催するとのこと。

（今大会は、鈴木承二さんがバンコク駐在時代に、各国の同好者に提案し実現に尽力された大会です。）

（文責　渡辺　誠）

参加者全員集合

体育館内風景（コートには各種競技用のラインが混在）

最近の我が国バスケットボール界の動向

［普及部］

2024.11～2025.6 の間に報道された記事を時系列に掲載

<u>2024 年</u>

・11/6、 NBA､河村勇輝が所属するグリズリーズは八村塁のレイカーズと初対戦、河村は２本のフリースローを決め、NBA 初得点をあげた。
・11/6、 日本男子日本代表チームのヘッドコーチに決まったトム・ホーバス氏は５日の記者会見で４年後のロサンゼルス五輪に向けて、「まだ、レベルアップできるし、新しいチャレンジが楽しみ」と抱負を語った。
・11/20、Bリーグは、19 日、2023～24 年シーズンの B1､B2 各クラブの決算概要を発表。B1 の A 東京、琉球、千葉 J などのチームの売上高が 30 億円を超え、B1､B2 全 38 クラブの売上高の合計は前シーズン比 33%増の約 552 億円となった。
・11/21、宇都宮で行われたアジアカップ予選に、日本は 93－73 でモンゴルに勝利。
・11/25、グアムで行われたアジアカップ予選に、日本はグアムに 83－78 で競り勝ち４戦全勝とし、来年の８月にサウジアラビアで行われる本戦出場を決めた。
・11/30、NBA レイカーズの八村塁選手が男子日本代表チームのトム・ホーバス HC 続投を批判した問題について、JBA 三屋会長が「コミュニケーション不足があった。齟齬がないようにしたい」と語った。

・12/8、第 76 回全日本大学選手権の女子決勝戦は、代々木第２体育館で行われ、６年連続同一チームの対戦。白鴎大学は東京医療保健大学を４度の延長戦の末に 111－103 で下し２大会連続、３度目の優勝を決めた。
・12/14、全日本大学選手権は男子決戦戦が群馬オープンハウスアリーナ太田で行われ、日本大学が東海大学を 70－60 で破り 15 大会ぶり 13 度目の優勝を果たした。
・12/15、皇后杯、全日本選手権のファイナルラウンドの決勝戦は、代々木第２体育館で行われ、富士通がアイシンを 65－55 で破り、17 大会ぶり４度目の優勝を果たした。
・12/19、Bリーグは、2026 年秋から始まるトップカテゴリー「Bリーグプレミア」の参入クラブに B1 の茨城と京都が加わると発表した。計 24 クラブとなる。
・12/28、全国高校選手権の女子決勝は、東京体育館で行われ、京都精華学園が 59－54 で慶誠（熊本）を破り、３年連続３度目の優勝を果たした。３連覇は大会史上２度目、全国高校総体と併せて「夏冬連覇」も３年連続を達成。
・12/29、全国高校選手権の男子決勝は、東京体育館で行われ、福岡大大濠が 77－57 で鳥取城北を下し、３年ぶり４度目の優勝を果たした。
・12/31、女子高校の強豪、桜花学園高（愛知）の監督を永く務めた井上真一さんが 31 日名古屋市内の病院で死去された。全国高校総体では 25 回、全国高校選手権では 24 回の優勝を果たした。多くの日本女子代表選手を育てた女子高校界の名監督。

2025 年

・1/9、第５回全国 U15 選手権大会「京王 Jr ウインターカップ 2024－25」が武蔵野の森総合スポーツセンターで開催された。男子決勝は、RIZINGS 徳島が 67－65 で琉球 15 を破り初優勝。女子決勝は、京都女子精華学園中が 88－50 で HOOPS4HOPE（千葉）を破り優勝し、２連覇を果たした。
・１/19、りそなグループBリーグオールスター戦が船橋市のららアリーナ東京ベイで開催され、BホワイトがBブラックを 119－114 で破った。MVP には富樫選手が選ばれた。
・1/22、日本協会（JBA）改革のために国際バスケットボール連盟（FIBA）が設置した、「ジャパン 2024 タスクフォース」が 21 日に解散した。男子の国内リーグ分裂のため、2014 年に JBA が FIBA から資格停止を受け、タスクフォースは 2015 年から活動していた。男子のリーグ統一、JBA の組織統治強化、強化体制の構築の課題は、すべて解決したと報告。

・2/11、女子Wリーグの新設大会、ユナイテッドカップは９日横浜武道館でファイナルステージ決勝が行われ、シャンソン化粧品がデンソーを 79－63 で破り初代女王となった。
・2/14、女子日本代表のコーリー・ゲインズ新ヘッドコーチが就任会見で「全体の底上げ」が必要と語った。
・2/20、中国の深圳で行われたアジアカップ 2025 予選(Window3)で男子日本代表チームは中国に 58－100 で大敗。成績は両チームともに４勝１敗。
・2/23、モンゴルのウランバートルで行われたアジアカップ 2025 予選(Window3)最終戦で、男子日本代表チームはモンゴルを 89－79 で振り切り、５勝１敗で予選を終了。

・3/16、天皇杯全日本選手権第 100 回大会は、国立競技場で決勝戦が行われ、琉球が A 東京を 60－49 で破り、初優勝。
・3/29、JBA 会長の三屋裕子日本オリンピック委員会（JOC）副会長（67 歳、現在、JOC 会長代行）も、６月に役員改選の JOC の新会長候補に日本サッカー協会前会長の田島幸三氏（67 歳）と共に挙がっていることがわかった。

・4/14、Wリーグプレーオフ決勝戦が両チーム２勝２敗の後、東京・武蔵野の森総合スポーツプラザで第５戦（３戦先勝方式）が行われ、富士通が、デンソーを 75－60 で下し、２季連続３度目のリーグ優勝を果たした。プレーオフの最優秀選手には富士通の町田瑠偉選手が選ばれた。

・5/4、女子日本リーグ（WJBL）は、Wリーグプレミアのレギュラーシーズンの表彰があり、最優秀選手に町田瑠偉（富士通）選手が初選出された。最優秀監督は、BT デーブス監督（富士通）が選出され、２季連続２度目の受賞となった。
・5/4、りそなグループ B1リーグ東地区１位の宇都宮は、83－63 で越谷を下し、勝率全体１位でレギュラーシーズンを終了した。チャンピオンシップの準々決勝は琉球－島根、宇都宮－三河、三遠－群馬、A東京－千葉Ｊの試合となる。
・5/9、琉球は、島根を２連勝で下し、準決勝進出を決めた。

・5/11、準々決勝第２戦が行われ、千葉ＪはA東京を、三遠は群馬を、宇都宮は三河をそれぞれ破り、２連勝で準決勝に進出した。B2 は、富山とA千葉が決勝に進み、ともに来季 1 部昇格を決めた。
・5/14、女子Wリーグ富士通は、BT テーブス・ヘッドコーチの退任を発表した。
・5/19、チャンピオンシップ準決勝は、1 勝 1 敗の後、第３戦があり、宇都宮が千葉Ｊを 82－71、琉球が三遠を 77－69 で下し、それぞれが決勝に進んだ。
・5/22、Ｂリーグ２部年間優勝クラブを決めるプレーオフ決勝戦が停電で中止になり、Ｂリーグは、千葉と富山グラウジーズの両チームを優勝とすると発表。優勝賞金も２クラブに規定通り 1,000 万円を授与する。
・5/24、B1リーグチャンピオンシップ決勝が横浜アリーナで開幕。宇都宮（東地区 1 位）と琉球（西地区 1 位）と対戦。宇都宮が琉球を 81－68 で下して先勝し、３季ぶりのリーグ制覇に王手をかけた。
・5/25、チャンピオンシップ決勝第２戦が行われ、琉球が宇都宮を 87－75 で破り 1 勝 1 敗とした。
・5/27、チャンピオンシップ決勝戦第３戦が行われ、宇都宮が琉球を 73－71 で破り、３季ぶり３度目の優勝を果たした。宇都宮は、一時、12 点差をつけられた時もあったが、後半に比江島の３点シュートから始まった攻撃により最終第4Q の残り 33 秒で逆転し、２点差で終了。チャンピオンシップの最優秀選手には得点力がある宇都宮のニュービル選手が選ばれた。琉球は、攻撃の組み立てを作るポイントガードの岸本選手がけがで欠場したことが響いた。

・6/3、男子B1リーグのレバンガ北海道は、富永啓生選手と 2025～2026 シーズンの契約を結んだと発表。
・6/6、女子Wリーグは、2005～26 年に導入する外国人選手の登録規定を発表、「通算５年以上、日本に在留」が必要との条件を撤廃した。
・6/8、女子国際強化試合が愛知県豊田合成記念体育館で行われ、日本は台湾に 95－42 で勝利、選手もゲインズHCも新たなスタートを切った。
・6/9、女子国際強化試合第２戦目、前日に続き、日本は台湾に 89－45 で快勝。
・6/13、アラブ首長国連邦・ドバイで行われた、バスケットボール男子のチャンピオンズリーグアジア決勝戦で、B1 優勝チームの宇都宮は、前回の覇者レバノンのクラブを 94－93 で破り初優勝。９月にシンガポールで開催される予定の FIBA インターコンチネンタルカップへの出場権を獲得、日本の頂点からアジアの頂点へさらに世界へ挑戦する。

以上

秋田県バスケットボールのあけぼの

－秋田県のバスケットボール普及のながれ－

［歴史部］

公益財団法人秋田県バスケットボール協会の設立年月日は、1946（昭 21）年４月とされている。今回は、秋田県にバスケットボール競技が普及した大正時代の末から昭和初期の時代までの活動を報告する。

●「日本体育協会 75 年史」　（財団法人日本体育協会・昭和 61 年６月 25 日発行）

「秋田県体育協会」参考

秋田県体育協会の設立は 1923（大 12）年４月 15 日とされ、同年記念の事業として６月 10 日に秋田県師範学校の校庭で全県オリンピック大会が開催されている。参加した 10 部門（競技種目）には、バスケットボール競技はなかった。昭和に入って東京府立４中から千田三省体育主事が赴任して体育協会の再改革に努めた（註：この段階で中央の団体とのつながりが深まったのではないか)。再編成によって種目は 12 部門に、1928（昭３）年には 14 部門に増加し、この時期にバスケットボール競技が加わったのではないかと推察される。

●「バスケットボールの歩み － 日本バスケットボール 50 年史」

（財団法人日本バスケットボール協会・昭和 56 年３月 30 日発行）参考

1923（大２）年「学校体操教授要目」が文部省訓令第一号として公布され、その指導対象は小学校、師範学校、中等学校、高等女学校などで、体育教材はスウェーデン式の体操が中心であったが、「競争を主とする遊戯」の中に「徒競走」や「フットボール」とともに「バスケットボール」が教授要目として採用されている。

「秋田県のバスケットボールのあけぼの」は、1923（大 12）年８月、秋田県体育協会が三橋義雄（当時東京都体育科体育主事）を主任講師（助手 11 名）として迎え、各種総合体育講習会を秋田師範学校で開催し、その時初めてバスケットボールが紹介されたといわれている（三橋義雄による体育研究所は、スウェーデン式体操を普及の目的に活動していたが、バスケットボール、バレーボール種目なども指導した)。

その２年後、早くも 1925（大 14）年、第 1 回全県オープン大会が開かれ、対外試合としては 1926（大 15）年 11 月、隣県青森師範を招いて全県中等学校並びに一般大会を開催している。

昭和初期は小学校を中心に尋常科、高等科の全県大会、また中等学校にとその普及ぶりはものすごいものであった。秋田中学は、1934（昭９）年の第 11 回全国中等学校（現インターハイ）で中毒事件があったため準決勝で涙を呑んだが、第 13 回大会には見事全国制覇の偉業を成し遂げるに至った。名門秋田師範を始め、女子では大曲高女、花輪高女等が大活躍し、秋田の名声を全国に広めていったが、太平洋戦争によって多くのスポーツとともにバスケットも一時中断された。　―後略―

戦前の秋田チームの記録

●「バスケットボール第２巻１月号」　1931（昭６）年１月・発行人　薬師寺尊正

「地方協会便り」秋田県体育協会主催三籠球大会を観る　遠藤彌太郎

秋田県では籠球の大会というのは極く少ない。９月にはいって、小学校、女子中等学校、男子中等学校の三大会が体育協会主催のもとに開かれたにすぎぬ（勿論此の外、小範囲のものでは、大館高女、横手高女、仙北郡教育界第二研究会の主催で小学生大会はあったが)。　―後略―

(A)　全県小学校籠球大会　９月 24 日、秋田市中通小学校戸外コートで開催。
鷹巣、明徳、土崎、大館、五城目、旭北、太平の７校　優勝は鷹巣
高等科女子　大館女子、明徳の２校　優勝は大館女子
高等科男子　田澤、明徳の２校　優勝は田澤

(B)　全県女子中等学校籠球大会　９月 28 日、秋田市郊外将軍野遊園地戸外コートで開催　大館女子職業、能代高女、鷹巣實女、聖霊高女、秋田高女、秋田女師、本荘高女、花輪高女、土崎實女、小坂實女、大館高女の 11 校　優勝は大館高女

(C)　全県男子中等学校籠球大会　10 月 12 日、秋田市郊外将軍野遊園地戸外コートで開催。秋田師範、秋田中学、大館中学、秋田工業の４校リーグ戦　秋田師範３勝優勝。秋田師範は、極東選手権の植田選手、秋田中学は同様に剣持選手の指導を受けている。秋田県の籠球界も中央からコーチを頼んで指導してもらって長足の進歩だ。出来得るならば設備の良いコートで、しっかりした審判（東京からでも呼んで）のもと、試合をさせたい。もう一つは早く中央の競技会に進出させたい。その為には学校当局や先輩に理解してもらはねばならぬ。

●「籠球 NO.1」　1931（昭６）年５月発行

１月 全日本男子 桂城クラブ（秋田代表）不参加により茨城師範に２－０　敗退。
同年秋田師範、大館中学、秋田中学、秋田工業でリーグ戦を行い秋田師範が３勝で優勝
桂城クラブ主催で秋田県中等学校籠球大会が行われ、秋田師範、大館中学、秋田工業のリーグ戦を開催

最後に

1923（大 12）年、秋田県体育協会に招かれた三橋体育研究所（代表三橋喜久雄）により秋田県にバスケットボール競技が伝えられ、この数年の間に「学校体育」として普及していた。

1930 年に発行された「バスケットボール」によると、当時の日本代表選手を招いてチームの指導をうけるなど、秋田県の籠球の大会は極少ないと語っているが（地方協会便り・遠藤彌太郎)、「バスケットボール競技」は全県に徐々に広まっている。

秋田県体育協会は、日本バスケットボール協会の関係を保ちながら（全日本選手権大会への参加など)、秋田県体育協会主催で各種大会が開催された。

1930 年に全国的組織（日本バスケットボール協会）が結成されたが、秋田県では、日本協会の秋田県支部を組織するに至らず、秋田県体育協会主導のもとに「学校体育」(学校ＯＢチームも含め）として「バスケットボール競技」が普及したと考えられる。

以上

高校籠球ふるさと記（秋田県編）

［歴史部］

戦後の秋田県の高校バスケットボールを振り返ると、男子では秋田の 1954 年秋田インターハイ第４位、1960 年代後半以降の能代工業の全国レベルでの圧倒的な強さ（1967 年埼玉国体での初優勝以降、40 年の間にインターハイ 22 回、国体 16 回、ウィンターカップ 20 回の優勝を達成）、女子では秋田北の 1958 年富山国体優勝、大曲の 1967 年埼玉国体優勝、秋田市立の 1969 年長崎国体第３位、大曲の 1971 年インターハイ優勝、同年和歌山国体での大曲、角館南中心の選抜チームの優勝、角館南の 1972 年（３位）、73 年（２位）、74 年（４位）のインターハイ連続ベスト４入り。秋田北の 1977 年インターハイ第３位等、全国レベルでの活躍が際立っている。

その強さの根源は何か、それを探るべく、その歴史を戦前にまで遡ってみよう。

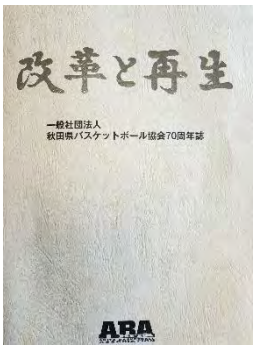
男子では 1932 年頃には、旧制秋田中、旧制秋田師範が強く、特に秋田中は関東の早稲田大、慶応大や中央大でプレーする卒業生が新しい戦法（例示：早大のエイト）を現役に伝授、1936 年には秋田中が全国制覇している。1937 年からは能代工業が台頭してくる。

女子では、1933 年頃には、大曲高女、花輪高女が強く、1935 年以降は花輪高女の黄金時代が続いた。

さて、戦後であるが、秋田県は戦争の被害が比較的少なく、学校の体育館等もそのまま残っており、バスケットの再開には比較的恵まれていたと言えよう。かつて旧制中学時代に活躍した選手が戦争から復員し、県内各地でチームが作られ、バスケットが再開された。1946 年には大野博通を中心に県協会が設立された。秋田師範学校に奉職の文理大卒の池上喜八郎と関史郎が、全県に巡回指導を試み、バスケットの普及に努めた。加えて、旧制秋田中他から関東の大学（東教大、早大、慶大、明大等）に進学したOB達が秋田での合宿（1947 年から 1953 年頃）のついでに高校生の指導を行うほか、日本協会からも 1956 年から 60 年にかけて講師が派遣され、技術講習会や審判講習会が開催された。

このような歴史と伝統を誇る秋田県のバスケットボール界であるが、本誌では 1948（昭 23）年から 1988（昭 63）年迄を対象に、その間、県内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者、更には協会関係者にも焦点を当て、秋田県の高校バスケットボール界を通観してみた。内容的には秋田県バスケットボール協会 40 年史の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。

秋田県バスケットボール協会 40 年史



秋田県バスケットボール協会 70 周年誌

（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓、選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、高校名は原則略称、秋田県出身者以外は出身都道府県名を記載）

先ずは、男子であるが、大きくは４つの期間に分けることができる。

第一期（1948 年～62 年）

前半は美入野（後の横手）と秋田南、後半は秋田と秋田工業の活躍が目立った。インターハイには秋田工業が５回、秋田が４回、美入野と秋田南が各２回、角館北、能代工、秋田短大付属（後の秋田経法大付属）が各１回出場している。秋田の 54 年インターハイでのベスト４入りは特筆、賞賛に値する。美入野の 49 年、54 年インターハイでのベスト８入りも賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、川本禮治郎（美入野 55-立教大-八幡製鉄：63 年アジア大会代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、長谷部（秋田短大付属 55）、松田、森川、佐々木、中村、長谷川、早川（ともに秋田 55）、小川、高橋、金田、佐藤、小西（ともに美入野 55）、伊藤（角館 58-日大）、柳原（秋田 58-一橋大）、鈴木（秋田市立 60-日体大-千葉県教員）、川村（秋田 60-東工大）、阿部（横手 61-明治大）らがいる。

第二期（1963 年～69 年）

能代工の台頭期。インターハイには 68 年を除き、６回出場。秋田と秋田工が各１回出場。能代工の 67 年の国体優勝、70 年以降の同校の輝かしい戦績の嚆矢ともいえる優勝は、特筆、賞賛に値する。能代工の６５年インターハイでのベスト８入りも賞賛に値する。
この時期の著名選手としては、川本昌治郎（能代工 70-新日鉄）がいる。

この時期、活躍した選手では、半田（秋田工 64-日体大）、大野（秋田短大付属 65-芝浦工大）、成田（能代工 65-芝浦工大）、山本（能代工 66-明治大）、佐々木（大曲 66-国士館大）、山本（秋田工 67-日体大）、斉藤（能代工 67-明治大）、菊池（能代工 68-芝浦工大-日本鋼管）、吉田（能代工 68-専修大）、山本（能代工 68-中京大-大和証券）、佐々木（能代工 70-専修大-ゼネラル電機）らがいる。

第三期（1970 年～78 年）

能代工の圧倒的な強さが目立つ９年間、インターハイには連続出場。大曲工、雄物川、大舘鳳鳴が各１回出場。能代工業の優勝３回、第３位が３回、ベスト８が２回は、特筆、賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、山本浩二（能代工 71-明治大-日本鋼管:モントリオールオリンピック代表、75 年、77 年アジア選手権代表、78 年アジア大会代表)、小野秀二（能代工 76-筑波大-住友金属：78 年アジア大会代表、79 年ユニバーシアード代表、82 年アジア大会代表)、内海知秀（青森県：能代工 77-日体大-日本鉱業：79 年ユニバーシアード代表)、鈴木貴美一（能代工 78-法政大-日本鉱業：81 年ユニバーシアード代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、小玉（能代工 71-明治大-新日鉄)、三沢（能代工 71-日体大-熊谷組)、佐々木（能代工 71-専修大)、中嶋（能代工 71-専修大-東芝小向)、米屋（能代工 72-新日鉄)、山本（能代工 72-中京大-大和証券)、猿田（能代工 72-中京大-日本鉱業)、高橋（大曲農 73-日体大)、畑沢（秋田 73-東京教育大)、横山（湯沢 73-東京経済大)、七尾（能代工 73-法政大-秋田県教員：湯沢北、能代西教頭、校長）、上田（能代工 73-法政大)、石川（能代工 73-日体大-熊谷組)、若狭（能代工 73-拓殖大)、和田（能代工 73-明治大-日本通運監督)、松田（能代工 73-日体大)、梅津（由利工 74-秋田いすゞ)、伊藤、小畠（と

もに能代工 74-専修大)、芳賀（能代工 74-秋田いすゞ)、桜庭（能代工 75-新日鉄)、今井（由利工 75-秋田いすゞ)、岩谷（能代工 75-中京大-トヨタ自工)、松田（能代工 75-日体大)、伊藤、小野（ともに能代工 75-拓殖大)、斉藤（由利工 76-国士館大)、舟木（能代工 76-法政大-秋田いすゞ)、田口（能代工 76-法政大)、伊藤（雄物川 77-新日鉄)、長沢（秋田経大付 77-拓殖大-日本鉱業)、近藤（秋田経大付 77-秋田いすゞ)、佐藤（大曲農 77-秋田いすゞ)、川村、長崎（ともに能代工 77-新日鉄)、三浦（能代工 77-法政大-日立本社)、舘岡（能代工 77-筑波大)、福山（能代工 78-国士館大-マツダオート東京)、高橋（能代工 78-東京農大)、岡（能代工 78-拓殖大)、松橋（能代工 78-専修大)、児玉（能代工 78-専修大：専修大女子部監督)、浅利（大館鳳鳴 78-青山学院大)、菊地（能代工 79-国士館大-マツダオート東京)、下山（能代工 79-専修大)、安田（能代工 79-日大)、籾山（能代工 79-拓殖大)、長浜（能代工 79-東京農大)、平野（秋田経大付 79-専修大)、吾妻（秋田経大付 79-秋田いすゞ）らがいる。

第四期（1979 年～88 年）

第３期同様、能代工の圧倒的な強さが目立つ 10 年間、インターハイには連続出場。秋田工が１回出場。能代工の 79 年からの連続優勝７回、第２位が２回、ベスト４が１回は、特筆、賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、斎藤慎一（能代工 80-日体大-日本鋼管：83 年ユニバーシアード代表、85 年アジア選手権代表)、本間大輔（能代工 80-日体大-熊谷組：83 年ユニバーシアード代表)、加藤三彦（能代工 81-筑波大-秋田いすゞ：85 年ユニバーシアード代表、85 年アジア選手権代表、86 年アジア大会代表)、岡部雅行（秋田南 81-明治大-三井生命：86 年アジア大会代表)、藤原浩孝（能代工 82-日体大-住友金属：87 年ユニバーシアード代表)、東出浩一（能代工 82-日大-東芝：85 年ユニバーシアード代表)、新藤一秋（能代工 85-拓殖大-日本鉱業：89 年ユニバーシアード代表)、菅原智喜（能代工 85-秋田経法大-いすゞ自動車：89 年ユニバーシアード代表)、長谷川誠（能代工 90-日大-松下電器-ゼクセル-いすゞ自動車-新潟アルビレックス-秋田ノーザンハピネッツ：94 年アジア大会代表、95 年ユニバーシアード代表：大会得点王となり、日本を準優勝に導いた。95 年、97 年アジア選手権代表、98 年世界選手権代表）

この時期、活躍した選手では、金谷（能代工 80-大東文化大）、橘田（能代工 80-国士館大）、伊藤（能代工 80-専修大）、一方井（能代工 80-法政大-三菱電機)、渡部（能代工 80-秋田いすゞ)、木村（能代工 81-日体大-日本鉱業)、長谷川（能代工 81-日大-東芝)、佐藤（能代工 81-日大-日本鉱業：ジャパンエナジー監督)、伊藤（能代工 81-日体大-世田谷学園監督)、加藤（合川 81-秋田いすゞ)、長谷川毅（能代工 82-専修大-熊谷組)、鈴木篤（能代工 82-中京大-秋田いすゞ-いすゞ自動車)、佐々木（能代工 82-日体大-能代工教諭)、伊藤（能代工 82-専修大)、加藤（能代工 82-国士館大)、門間（能代工 82-東京農大)、長谷川（能代工 82-中京大-熊谷組)、鈴木（能代工 82-中京大-いすゞ自動車）、九島（合川 82-秋田いすゞ）、進藤（能代工 83-筑波大-東京海上）、道川屋（能代工 83-専修大-熊谷組）、木村（山形県：能代工 83-日体大-三菱電機）、樋渡（横手 83-筑波大-秋田県教員：湯沢翔北監督）、佐藤（大曲農 83-秋田いすゞ）、山本（横手 83-明治大-ゼクセル）、高橋（横手工 83-東京農大）、加藤（大曲農 83-東京農大）、高橋（大曲農 83-東京農大-マツダオート東京）、佐藤（合川 83-いすゞ自動車）、目（山口県：能代工 84-日大-ゼクセル）、安斉、田村、畠山（ともに能代工 84-専修大）、中山（能代工 84-東京農大）、高橋（大曲農

84-東京農大-アンフィニ東京）、中川（能代 84-明大）、山谷（能代工 85-早稲田大）、直町（能代工 85-中央大）、奈良（能代工 85-新日鉄）、安達（宮城県：能代工 86-日体大-日鉱共石）、中山（群馬県：能代工 86-早稲田大-住友金属）、金子（東京都：能代工 86-筑波大-NKK）、渡部（能代工 86-順天堂大）、大日向（大曲農 86-日体大-石川県教員：県協会常務理事）、塩屋（秋田経法大付 86-秋田経法大-いすゞ自動車）、加賀谷（能代工 87-秋田経法大-熊谷組、アイシン精機）、関谷（能代工 87-順天堂大-丸紅）、能登屋（能代工 87-順天堂大-秋田県教員）、衛藤（能代工 87-専修大）、元居（北海道：能代工 87-拓殖大-いすゞ自動車）、牧野（大館工 87-秋田経法大-日立本社）、小林（能代工 88-日体大）、鈴木（能代工 88-早稲田大）、高橋（山形県：能代工 88-日大-熊谷組）、藤本（能代工 88-秋田経法大-日立本社）、菊池、佐々木（ともに大曲農 88-秋田経法大-日立本社）、三浦（岩手県：能代工 89-日体大-NKK）、佐藤（東京都：能代工 89-明治大-住友金属-アイシン精機）、佐々木（能代工 89-専修大-いすゞ自動車）、門間（能代工 89-拓殖大）、関口（埼玉県：能代工 90-日大-トヨタ自動車）、本間（能代工 90-秋田経法大-三井生命）、村井（秋田 90-明治大）らがいる。

次に、女子であるが、大きくは４つの期間に分けることができる。

第一期（1948 年～58 年）

秋田北の１強時代。インターハイ（54 年は２校出場）には秋田北が６回，大曲が２回、花輪、角館南、大舘桂、能代北が各 1 回出場している。秋田北の 58 年富山国体優勝は、特筆、賞賛に値する。大曲の 52 年インターハイベスト８入り、秋田北の 54 年インターハイベスト８入りも賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、清水洋子（大曲 53-三井生命：58 年東南アジア親善大会代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、男鹿谷（能代北 54-北芝電機）、田松（秋田北 55-北芝電機）、堀井（秋田市立 56-日紡山崎）、56 年神戸国体一般女子で初優勝した秋田営林局の主力メンバーの阿部、時田、田牧、佐々木、続（以上、秋田北 54-56）、長崎（大館桂 56）、花岡（秋田市立）、大川（敬愛）や工藤（敬愛 57-日女体短大）、58 年富山国体優勝の秋田北メンバーである石塚（59-東芝）、佐藤（久）（59-三井生命）、八柳（59-東芝）、松坂、佐藤（美）、佐藤（孝）（ともに 59）らがいる。

第二期（1959 年～66 年）

秋田北に代わり、敬愛学園の強さが目立った。インターハイ（66 年は２校出場）には敬愛学園が５回、秋田北が２回、大舘桂と大曲が各 1 回出場している。

この時期の著名選手としては、小林町子（大館桂 64-東芝-日体大：67 年ユニバーシアード代表）、渡部亮子（敬愛 65-日本通運：65 年朴杯東南アジア大会代表）、樋渡美紀子（敬愛 66-日体大-秋田県教員：日体大時代学生ベスト５）がいる。

因みに、秋田県出身で高校から愛知県の安城学園に進学し、その後、大成した選手に浅野一子（安城 65-安城短大-興銀：67 年ユニバーシアード代表）、太田瀬静子（安城 65-安城短大-興銀：67 年ユニバーシアード代表、68 年アジア選手権代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、石井（敬愛 59-日立那珂）、田中（秋田花輪 60-北芝電機）、西山、西村（ともに敬愛 60-リッカーミシン）、浅原（秋田北 60-東京教育大）、関（大館

桂 61-日立那珂）、瀬谷、佐藤（ともに敬愛 61-日立那珂）、菊地（秋田市立 62-リッカーミシン）、宇佐美（秋田北 62-安城学園短大）、小野、小熊（ともに敬愛 63-北芝電機）、田村（敬愛 63-リッカーミシン）、鎌田（秋田北 64-東京教育大）、粂田（敬愛 64-安田生命）、佐藤（秋田北 66-日女体大）らがいる。

第三期（1967 年～77 年）

大曲の活躍に加え、後半から台頭してきたのが、古豪の角館南と秋田市立の２校。いずれも全国でのハイレベルな戦績を残しており、秋田県女子の実力を全国に強烈に印象付けたといっても過言ではない。インターハイには大曲が５回、角館南が３回、秋田市立が２回、湯沢北と能代北が各１回出場している。大曲の 67 年埼玉国体優勝、70 年インターハイ準優勝、71 年インターハイ優勝、角館南の 71 年和歌山国体優勝、72 年インターハイ第３位、73 年インターハイ準優勝、74 年インターハイベスト４、秋田市立の 69 年長崎国体第３位、77 年インターハイ第３位は、いずれも特筆、賞賛に値する。大曲の 67 年、76 年インターハイベスト８、能代北の 69 年インターハイベスト８も賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、羽根川洋子（大曲 69-第一勧銀:74 年アジア選手権代表）、西根京子（能代北 70-第一勧銀：74 年アジア選手権代表）、高川定子（角館南 72-共同石油：78 年アジア選手権代表）、渋川友子（角館南 74-第一勧銀：78 年アジア大会代表）、鈴木紀子（大曲 74-共同石油：78 年アジア大会代表）、渡部真理子（大曲 77-共同石油：78 年アジア選手権代表）伊藤正子（秋田市立 77-日立戸塚）がいる。

この時期、活躍した選手では、堀川（大曲 68）、佐川（大曲 68-日体大）、佐藤（湯沢北 68-ユニチカ山崎）、宇佐美（秋田北 68-日体大）、長井（大曲 69）、高橋（秋田市立 68-日立甲府）、佐藤、村上（ともに大曲 69-三井生命）、西根（能代北 70-第一勧銀）、小松（大曲 71-共同石油）、高橋、佐々木（ともに大曲 71-第一勧銀）、畠山（角館南 71-秋田短大-日立甲府）、吉川（秋田市立 71-日立甲府）、今野（大曲 72-第一勧銀）、安田（秋田市立 72-日立戸塚）、右谷（大曲 72-三井生命）、小西（湯沢北 72-三井生命）、佐藤（大曲 72-共同石油）、佐藤、奥山（ともに角館南 72-共同石油）、曾根（敬愛学園 72-日女体大）、高橋（秋田市立 73-日立甲府）、小松（角館南 74-ユニチカ山崎）、小林（角館南 74-日立甲府）、堀田（大曲 74-第一勧銀）、高橋（角館南 75-第一勧銀）、国柄（能代北 75-筑波大）、進藤（秋田市立 76-日体大）、渡辺（大曲 76-日体大）、佐藤（大曲 77-第一勧銀）、西島（角館南 77-日立甲府）、伊藤（秋田市立 77-日立戸塚）、長谷川（大曲 78-筑波大）、斉藤（秋田経大付属 78-市邨学園大）、鷺谷（秋田市立 78-第一勧銀）、西鳥羽（角館南 78-日立甲府）らがいる。

第四期（1978 年～88 年）

古豪の大曲、湯沢北に加え、新しく台頭してきたのが、秋田経済大付属。インターハイ（84 年は２校出場）には、湯沢北と秋田経済大付属が各４回、大曲が３回、能代北が１回出場している。大曲の 84 年、85 年インターハイベスト８、秋田経済大付属の 80 年インターハイベスト８、湯沢北の 87 年インターハイベスト８は、賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、伊藤久美子（秋田経法大付属 84-日体大：87 年ユニバーシアード代表）がいる。

この時期、活躍した選手では千葉（角館南 79-日女体大）、木村（大館桂 79-市邨学園大）、石橋（角館南 80-日体大）渡部（能代北 80-筑波大）、阿部（秋田北 80-日体大）、山谷（能

代北 81-日女体大）、工藤（秋田経大付 81-北海道短大）、三浦（秋田経大付 81）、小松（角館南 82-第一勧銀）、佐々木（角館南 82-日立甲府）、橋本（湯沢北 82-シャンソン化粧品）、鎌田（能代北 82-日女体大）、内田（大館桂 82-東女体大）、立山（湯沢北 83-三菱電機名古屋）、吉田、舘岡（ともに秋田経大付 82-日本電気）、進藤（大曲 83-日本電気）、武石（湯沢北 83-日本電気）、石沢、佐々木（ともに秋田経法大付 84-日立那珂）、伊藤（秋田経法大付 84-日体大-日本航空）、一関（秋田経法大付 84-日体大-千葉県昭和学院教員）、斉藤（角館南 84-日体大）、川村（能代北 85-東海大）、長谷川（湯沢北 85-青山学院大）、三浦（大曲 85-日女体大）、石塚（大曲 85-青山学院大）、戸嶋（花輪 85-日本通運）、加賀谷（能代商 85-三井生命）、桜田（能代北 86-日立那珂）、田口（大曲 87-日体大）、小林（能代北 87-日本通運）、糸井（秋田経法大付 87-共同石油）、柿崎（湯沢北 88-シャンソン化粧品）、塚田（秋田経法大付 88-日本電気）、畑沢（能代北 88-日立戸塚）、武石、児玉（ともに湯沢北 88-三井生命）、進藤（大曲 88-東芝名古屋）、高橋（大曲 88-山形女短大）、斉藤（湯沢北 88-山形女短大）、成田（能代北 88-山形女短大）、照井（大曲 88-鷺宮製作所）、高橋（能代北 89-富士通）、川又（花輪 89-日本通運）、佐藤（大曲 89-三井生命）、児玉（秋田経法大付 89-日本電気）、泉（秋田経法大付 89-日立甲府）、三浦（秋田北 89-興銀）、田中（能代北 89-鷺宮製作所）らがいる。

＜コーチ・指導者＞

・加藤　廣志　1937 年秋田県生まれ。能代工業から日体大を卒業後、母校の教員でバスケットボール部監督。1960 年代、隆盛を極めていた新潟県の三条高校の中村コーチの元に通うといった努力を続け乍ら「平面が立体を制する」理論（都会チームに勝つには・ルーズボールに強い・長時間練習によるスタミナ・秋田県人特有の粘っこさ）を打ち立て、1988 年度までにインターハイ通算 10 回(含む７連勝)、選抜大会通算８回(含む３連勝２回)、国体通算８回優勝を重ねる。特に 85 年度は、５度目の３冠にまでチームを導いた、誰もが認める高校バスケット界の名将。

・加藤　雅春　東京高師から文理大卒。秋田北高校を指導、国体優勝。1960 年に秋田を離れ、千葉県習志野高校の監督として 1966 年インターハイで加藤監督が率いる能代工業に終了間際に 1 点差で逆転辛勝。その後も勝ち進み、チームを優勝に導いた名将。日本協会理事。

・菅原　正一　大曲高校の監督として同校を 70 年インターハイ準優勝、71 年インターハイ優勝に導いた名将。

・堀川　康人　大曲高校のコーチとして菅原監督を支え、同校を 70 年インターハイ準優勝、71 年インターハイ優勝に導いた名将。

・草薙　稲太郎　66 年から角館南に赴任、71 年インターハイ優勝の大曲を破り、国体では同校中心の選抜チームで優勝。インターハイでは 72 年に第３位、73 年に第２位、74 年に第４位に導いた名将。

＜県出身の全国レベルで活躍した名指導者・コーチ＞

・中村　和雄　1949 年秋田県生まれ、秋田高校から芝浦工大に進学、卒業後は長崎県鶴鳴女子高校の監督として 1966 年から 73 年の間に全国優勝３回を達成。

その後、共同石油監督として 1974 年から 92 年の間に全日本総合選手権で優勝５回、日本リーグで優勝６回を達成している。1979 年から 81 年までの 3 年間と 85 年から 90 年までの６年間、日本代表女子チームのヘッドコーチも務めた名将。

＜能代工業が生んだ名指導者・コーチ＞

・小野　秀二　住友金属を退社後、愛知学泉大学男子バスケット部の創部に関わり、88 年にヘッドコーチに就任、それから 13 年かけて同部をインカレでベスト４入りできるまで育て上げた。高校時代の恩師である加藤廣志からは「負けていいことはない」という競争心を植え付けて貰い、住金時代のコーチスタッフであった吉井四郎からはコーチに必要な様々な事を学び取り、それがコーチのベースになっていると述懐している。その後は、社会人トップリーグのトヨタ自動車アルバルク、日立サンロッカーズのコーチを歴任、日本の最前線で活躍してきた。

・内海　知秀　日本鉱業を最後に現役引退後、1988 年から札幌大の男子バスケット部のコーチに就任、13 年間務めた。高校時代の恩師である加藤廣志からは厳しい練習を通じ、忍耐力の大切さを教えて貰った。札幌大では、選手たちに基礎を徹底的に指導したが、その時の経験がコーチとしての土台になっていると述懐している。2001 年から 12 年まではJXのヘッドコーチとして同チームを何度も日本一に導いた。日本女子代表チームのヘッドコーチとしては、2004 年のアテネオリンピックへの出場を果たし、リオオリンピックの予選を兼ねたアジア選手権でも優勝、出場権を獲得した。

・鈴木　貴美一　日本鉱業で現役引退後、秋田経済法科大学のバスケット部のヘッドコーチに就任。高校時代、加藤廣志に仕込まれた厳しい練習、戦術・戦略よりも走る・ディフェンス・リバウンド・ルーズボール・といったことを徹底的に指導したと述懐している。チームも徐々に強くなり、東北選手権で優勝し、オールジャパンに出場できるまでに成長した。その経験を買われ、95 年からは日本リーグ２部のアイシン精機のコーチに就任、96 年には 1 部昇格。その後は、同チームを日本リーグ優勝５回、オールジャパン優勝８回を果たすといった輝かしい戦績を残した。2006、7 年と 2012、13 年は日本代表ヘッドコーチも務めた。

＜協会関係者＞

・辻　兵吉　　1926 年秋田市生まれ。旧制秋田中を経て 1952 年東京商大卒。秋田いすゞ社長時代の 1955 年に実業団チームを創設、日本リーグ２部から 1 部優勝できるチームに育て上げた。1995 年から 98 年まで日本バスケットボール協会会長

・蒔苗　昭三郎　1932 年北秋田郡（現大館市）生まれ。　明治大卒業、56 年に秋田いすゞ入社。常務、会長。　秋田ゼロックス社長。秋田県のバスケットボール振興に尽力。日本バスケットボール協会副会長、日本リーグ機構会長を歴任。

○ 歴代の会長・理事長（1948 年―1988 年）

児玉　政介	会長	1948 年―51 年
千田　敏	理事長	1948 年―51 年
湯瀬　安人	会長	1951 年―52 年
千田　敏	理事長	1951 年―52 年
山信田嘉平	会長	1952 年―56 年
千田　敏	理事長	1952 年―56 年
竹屋平太郎	理事長	1954 年―56 年
鈴木　伝八	会長	1957 年―69 年
竹谷平太郎	理事長	1957 年―58 年
柴田　兵衛	理事長	1959 年
辻　兵吉	理事長	1960 年―64 年
寺田　生男	理事長	1965 年―69 年
辻　兵吉	会長	1970 年―
寺田　生男	理事長	1970 年―79 年
蒔苗昭三郎	理事長	1980 年―

{編集後記}

今回、秋田県の高校バスケットの歴史を通観するに際し、資料提供の面で島本和彦様と石井一生様には多大なご協力を賜った。誌面を借りて謝意を表したい。

以上

【人物抄】　薬師寺　尊正

バスケットボール黎明期における功績

－月刊「バスケットボール」全 14 巻（1930 年８月～1931 年９月発刊）からみた－

［歴史部］

アメリカ･スプリングフィールドのYMCA体育学校を卒業した大森兵蔵は､1908(明 41)年、帰国後、東京YMCAの体育部主事に就任、バスケットボール競技を東京YMCAに紹介し指導した。この時期に、キリスト教系女学校などでもバスケットボールの対抗戦などが行われたていたが、その後しばらくは、この競技が全国に普及定着することはなかった。

F.H.ブラウンは、1913（大２）年に日本YMCA同盟の要請に応じて来日し、17 年間在日して全国のYMCAの活動に携わり、日本のスポーツ界の発展と国際化に尽力している。

翌年､日本で初めての国際大会であった第３回極東選手権競技大会が開催されたことが､日本にバスケットボール競技が普及し定着する道へと進む契機となった。日本にバスケットボールの競技が紹介されてから全国の統一的組織である｢大日本バスケットボール協会｣が創設される 1930（昭５）年９月までに 20 年間を要している。

「薬師寺尊正」の活動は､「日本のバスケットボールの黎明期」に相当する時期に、東京YMCA を基盤にして、その中心的な役割を果たしている。

1930（昭５）年８月に発刊された月刊「バスケットボール」の発行人「薬師寺」は、創刊号の中で｢私は過去 15 年間只管(ひたすら)に籠球の発達を祈り乍ら微力を尽くしてきた｣と語っている。15 年前の 1915（大４）年頃は、薬師寺は東京帝国大学法学部の現役の学生だったと推察される。翌年の 1916(大５)年に本郷追分に東京帝大YMCAの体育館が完成、1917（大６）年春にこの体育館で、東京YMCAのブラウンがレフェリーを行い、横浜YMCAチームと在日中国人チームの試合が行われている（横浜YMCAチームが大敗)。同年５月には、第３回極東選手権競技大会の代表チーム「京都YMCA」は、大日本体育協会のバスケット･ヴァレーボール委員長の近藤茂吉に引率され､東京帝大YMCA体育館に案内され､学生で埋まった階上の見物席の中で練習を行い、大学の有志を交えて練習試合を行っている。この時期には「帝大YMCAチーム」としてバスケットボールを楽しんでいたことも想定される。その後、ブラウンは「帝大YMCAチーム」を指導、その年 11 月に旧東京YMCAの体育館が竣工し、その活動の場所が「東京YMCAの体育館」に移ったため「東京YMCAチーム」にチーム名を変更している。

薬師寺は、1917（大正６）年から 1923（大正 12）年まで、東京YMCAチームの選手として活躍した。1919（大正８）年の第４回極東選手権競技大会（マニラ）に日本は不参加であったが、1921（大正 10）年５月に上海で開催された第５回極東選手権大会には代表チームに「東京YMCA」が参加し、大日本体育協会が主催した 11 月の第 1 回全日本選手権大会で「東京YMCA」が優勝した。

薬師寺は､「バスケットボール競技についての自身の知見を広める」ことにも努力している。1922（大正 11）年には薬師寺訳による「1922 年－1923 年新規則」を発行。同年、発刊

された大日本体育協会の機関誌「アスレチクス」の第 1 巻第 12 号から第８巻第５号までには「バスケットとヴァレーボールの競技の紹介」「技術について」「将来の展望」など多岐にわたる主題で 17 稿を投稿。1924（大正 13）年には「極東大会出場資格を得て」「バスケットボール私言」を主題に、「アサヒスポーツ」（大阪朝日新聞社）に投稿している。

1923（大正 12）年の５月に第６回極東選手権大会（大阪）が開催され、この大会の代表チームは「東京 YMCA と立教大学の選手の混成チーム」であった。東京 YMCA 体育館は、当時多くの大学があった神田地区にあり、大学生がトレーニングの場として徐々に活用するようになっていた。６月、第 1 回全国バスケットボール大会を報知新聞社の後援で東京YMCAが主催している。この年の９月に「関東大震災」が発生し、旧東京YMCA会館と体育館が焼失し活動場所を失った東京YMCAチームの活動も解散することとなる。薬師寺は、震災後も東京YMCA主催の大会を開催し、YMCA主導のバスケットボールの組織化を計っている。

1924（大 14）年 10 月に薬師寺は、大日本体育協会体育主事に就任。大日本体育協会は、その一部会として極東選手権競技大会・全日本選手権大会・明治神宮競技大会などの大会を主催していた。さらにバスケットボール競技の普及・発展をもたらすためには大学生が中心になって進めなければ将来の発展を望めないと考えていた。1930（昭５）年東京で開催された第９回極東選手権競技大会の準備委員会では、関東大学バスケットボール連盟の役員などが中心となって大会の運営を進め、その後「大日本バスケットボール協会」が誕生した。

当時、大日本体育協会の事務局に務めていた薬師寺は、第９回極東選手権競技大会終了後、本人都合で名誉主事を辞任。1913（大２）年に来日し 17 年間在日した東京YMCAのブラウンは、日本スポーツ界の国際化を進め、各種競技の普及の道を切り拓いた「日本スポーツ界の恩人」である。大森兵蔵がバスケットボール競技を紹介しブラウンが普及に努めたことで、東京YMCAを基盤にした薬師寺の 15 年間はブラウンの活動と一体であった。

東京YMCAチームの選手時代から大日本体育協会の事務局に勤務した時代を通し「バスケットボール競技の普及」に努めた薬師寺は、その中心的存在であった。第９回極東選手権競技大会終了後に、F.H.ブラウンが離日し「東京YMCAの時代の終焉」となった。

東京YMCAを基盤に日本のバスケットボール界の「黎明期」（新しい時代や文化などが始まろうとする時期や夜明けにあたる時期）に「只管籠球の発達を祈りながら微力を尽くした 15 年間」の功績は忘れてはいけない。月刊「バスケットボール」14 巻に書かれている内容は、薬師寺の「凝縮された最後の思い」を知ることができる貴重な資料である。

※　薬師寺尊正（やくしじたかまさ）によって 1930（昭５）年８月から 1931（昭６）年９月までに発行された月刊「バスケットボール」全 14 巻が（株）クレス出版から電子出版された際の推薦文を一部編集して掲載しました。

以上

（渡辺　誠　筆）

書籍紹介

谷釜尋徳氏　著書
『バスケットボール秘史』　（起源からＮＢＡ、Ｂリーグまで）を読んで

蒲田　尚史

光文社新書
（初版 2025 年 2 月）

今回、ご紹介させて頂くのは、2000 年から日本体育大学の現役選手として活躍、卒業後は、同大大学院に進学、日本のスポーツ史を研究テーマに博士号取得、現在は、東洋大学教授をされている谷釜尋徳氏の著書です。

本のタイトルが「秘史」となっていますが、表紙のコメントの通り、アメリカで生まれたバスケットボールの日本への伝来と戦術の進化、世界への挑戦と挫折の歴史がヴィヴィッドに描き出されている一冊です。

謂わば、上記の歴史の流れを縦糸に、それぞれの時代を象徴する出来事や人物を横糸にして織りなした作品で、きわめて読みやすい読み物となっています。

とりわけ、老生が注目した箇所は、1960 年代から 90 年代に活躍された日本人コーチの技術論です。

1964 年東京オリンピック大会の男子監督で「アップテンポからスローテンポへの切り替え」を試みた吉井四郎氏、1976 年モントリオールオリンピック大会の女子監督で「忍者ディフェンス」を生み出した尾崎正敏氏、1960 年日本体育大学卒業後、母校の能代工業高校を監督として指導し、「平面が立体を制する」をモットーに 60 年代後半から必勝不敗のチームを作りあげた加藤廣志氏、「大きくても走れる」日本体育大学の黄金時代を築いた清水義明氏の技術論です。

いずれも自チーム・選手の強みと弱みを分析すると同時に、相手チームとの関係で勝利に繋がるチャンスがどこにあるのか、落とし穴はどこにあるのかを分析し、それが見事に作戦に生かされている事実が、浮き彫りになっており、団塊世代の老生にとっては、肌感覚で理解できる部分も多く、興味深く読ませて頂きました。

筆者も初めに述べておられますが、今、「まさにバスケットボールの時代到来」と言っても過言ではないでしょう。新聞／ＴＶに代表される既存メディアは勿論、所謂、ソーシャル・メディアへの露出も急激に増えています。

そんな中、出版された本書を多くのバスケット関係者に読んで頂ければと願うと同時に、筆者には、「秘史」第二弾の出版をご期待申し上げたいと思います。

（振興会副理事長）

会員だより

九州地区（沖縄県含む）
シニアバスケットボールのあゆみ

田中　三夫
（福岡県）

1996（平成８）年に、山形県八幡町で始まった八幡カップに九州から佐賀県の「伊万里イエローズ」と沖縄県の「糸満バスケットクラブアメリカン」の２チームが参加され、これをきっかけに九州でもシニア大会が出来ないかと、当時伊万里市バスケットボール協会の金子義弘会長・吉武幾二郎理事長を中心に各県へ働きかけた結果、２年後の 1998 年７月に第１回全九州シニアバスケットボール古伊万里大会が開催されました。

福岡４・佐賀２・長崎２・熊本１・宮崎１・沖縄２の６県から 12 チームの参加があり第２回大会までは、佐賀県伊万里市で開催していただきました。第３回大会を沖縄県にて開催の際、第４回大会からは各県輪番制が決まり、以後各県順に開催していただいています。

第 10 回大会からは、スーパーシニア部門（＋50)、第 15 回大会からはシニア女子部門（＋40)、第 19 回・20 回大会ではゴールデンシニア部門をオープン競技として始め、第 21 回大会より正式競技となりました。

今年で九州大会は第 27 回大会（スーパー部門は 17 回・ゴーデン部門は７回・シニア女子部門は 13 回）を迎え、九州大会に出場するためには各県の予選会を勝ち抜いて来なければ大会に出場できなくなるまでの規模になっています。今年度は、九州大会の出場枠がシニア部門及びスーパー部門は各県２チームの計 16 チーム、ゴールデン部門及びシニア女子部門は、各県１チームの計８チームとなっております。

特にスーパー部門は、昨年度まで各県１チームの計８チームで開催していましたが、＋50 のプレーヤーが増えたことに伴い、各県２チームにて開催する運びとなりました。

更に、大会参加チームが増えたことと大会開催県の負担を減らす意味を込めて、大会を２県に分離して開催する事にしました。因みに、シニア部門とシニア女子部門を佐賀県・スーパー部門とゴールデン部門を福岡県にてそれぞれ開催予定です。

大会開催に当たり、九州大会では当初より特別ルールを設け、バスケットを愛する皆さんに少しでも試合に出ていただいたくて、「オンザコート 45 歳以上２名」「50 歳以上の得点は＋１点」を定めました。しかしながら、高齢化が進みスーパー部門・ゴールデン部門とプレー環境が広がってきたこともあり、「オンザコート 45 歳以上２名」は第 20 回大会より廃止し、少しでも全国ルールで戦えるようにと「50 歳以上の得点は＋１点」も第 26 回大会より前半（第１Ｑと第２Ｑ）のみ適用し後半は不適用としました。

現在九州地区のシニアの状況は、Ｂリーグの影響が強いと思われる沖縄県が特に力をつけ、シニア部門においては、九州大会だけでなく八幡カップの全国大会においても１位・２位を占める強さを誇っています。

全国大会の誘致も積極的に取り組み、横浜カップは、第５回大会（2016 年）を沖縄県で、第 12 回大会（2023 年）を福岡県で開催しております。八幡カップ全国大会は第 16 回（2014 年）を沖縄県・第 23 回（2018 年）を福岡県で開催しております。

来年２月には、横浜カップ第 15 回大会を福岡県久留米市にて開催する予定で準備中です。

今後も生涯スポーツとして、ゴールデン部門の拡充や更に＋70 代のプラチナ部門の立ち上げ等を視野に入れ九州地区のバスケットボールを盛り上げていきたいと思っております。

以上

八幡カップ第 16 回沖縄大会（2014 年）大会役員の皆さん（左端が田中三夫）

八幡カップ第 16 回沖縄大会（2014 年）懇親会

会員だより

「エンジョイクォーター」誕生秘話

辻　尚志

こんにちは。岡山でシニアバスケの世話をしております辻です。今回、最近の草バスケ大会ではよく採用されております「エンジョイクォーター」の誕生についてお話をいたします。

皆さんあまりご存じではないかと思いますが、このルールは岡山で生まれました。岡山では、2000 年度より八幡カップ連続出場へ向けて岡山シニアリーグを立ち上げており、年２回夏と冬に大会を開催しています。第１回目の開催は、2000 年７月２日なのですが、その時の競技規則に、「尚、今回は普段練習が出来ていない人も少しでも多く試合に参加できるように、各試合の前半最初の５分を Enjoy time とし、５分間の点差に関係なく得点の多いチームに２点を与え、以後の試合を２-０から再開します。（いくら点差がついても関係ありません。オフィシャルは５分または６分経過した時点でキリのいいところでメンバーチェンジの笛を鳴らしてください）」と記載されています。

このルールの採用は、それまでに参加していた八幡カップで、試合ではやはり勝敗にこだわりますから、せっかく遠征に参加してもらっても試合にほとんど出られない選手がいて申し訳なく感じていたからです。何とかみんなが試合に出ることが出来るようにしたいという思いからでした。

懐かしいのは、まだこの当時はクォーター制ではなく前後半制だったことと、得点の多いチームに２点を与えていたことです。翌年の 2001 年からはクォーター制になりましたので「エンジョイクォーター」と呼ぶようになりました。２点の得点につきましては、１点の追加では物足りないかなと思っていましたが、総得点があまり多くないシニアの試合では２点の獲得は比較的影響が大きく、本気で２点を取りに行くチームが出てきて、「炎上クォーター」になることもありましたので１点にしました。それによって本来の目的に戻っています。

またもう一つの目的は、一日２試合する可能性もある中で、主力選手が安心して一つのクォーターを休むことができることと、仮に人数の関係などでやむを得ず主力選手がエンジョイクォーターに出たとしても、このクォーターで自分のファール数が増えるのは無駄なので、エンジョイクォーターの選手に対してそこまでの激しいディフェンスはしないだろうという目論見があります。

そしてこのルールの全国大会デビューは、2017 年に第 22 回八幡カップを岡山で開催した時です。開催県の権限でこの時の要項に「また今回は、全試合第２ピリオドを Enjoy ピリオドとし、あまり勝敗にこだわらないピリオドとしますが・・・」という規則を追加しています。この当時はまだピリオドって言っていたんですね。その後も開催県の皆さんに採用していただき、徐々にいろんな大会に広まっていきました。

そして今では、あまり練習が出来ていない人や点差を争っている試合の中でコートに立つことに遠慮をしそうな人たちに大会参加の声をかけた時にも「よっしゃ、エンジョイクォーターがあるから行くわ！」と言ってもらえるようになりました。そしてコートに立ってシュートが入れば選手もみんなも大興奮ですし、勝てばチームのみんなに「1 点ゲット！」って感じです。逆にどんなに大差で負けても 1 点の負けですから、笑顔で「ごめんなさい」で許してもらえます。

これからもより多くのシニアの人たちに参加してもらい、元気高齢者、光輝高齢者の人たちが増えてくれれば私にとっての何よりの「エンジョイ」です。

以上

第３回エール杯
全国スーパーゴールデン・プラチナ シニアバスケットボールのご案内

バスケットボールを生涯愛し続けるスーパーゴールデンシニア（0-65）・プラチナシニア（0-70）の仲間が集い、自らの健康管理と地域及び生涯スポーツの普及・振興・発展に寄与することを目的としつつ、選手同士が互いにエールを送りあい、また地域の皆さんからも温かいエールを送ってもらうことを目指している大会です。

今年も９月 27 日（土）～28 日（日）に、ジップアリーナ岡山（岡山県総合グラウンド内）で第３回目を開催しますので、どうぞ岡山に遊びに来てください。

会員だより

WORLD MASTERS GAMES 台北大会に参加

諦めかけていたメダルを獲得

川戸　政角

今回、私たちが参加したのは「バスケットボール　オープン 70＋」です。
参加チームは５チーム。

１．台湾Ａ
２．台湾Ｂ
３．エストニア
４．オーストラリア
５．日本

＊日本チームの選手 11 名の
平均年齢は 72 歳、
平均身長は 178ｃｍ

＜日本チーム選手＞

名　前	年齢	身長	居住地
早川　通泰	74	184	山梨県
増井　英明	74	175	埼玉県
田中　三夫	74	190	福岡県
伊藤　恭介	72	170	北海道
菅原　邦宏	70	175	北海道
大西　卓日巨	74	170	東京都
那須原　知良	70	175	千葉県
加賀美　重明	70	182	山梨県
荻原　正吾	70	178	神奈川県
川戸　政角	74	184	神奈川県
城　尚史	71	172	広島県

5/22　日本出発　ホテルは相鉄ホテル（横浜が本社）台北西門に宿泊しましたので、ストレス無く過ごせたのもメダル獲得につながったと思います。ホテル到着後に認証センターに出向きパスポートを確認の上、写真入りパスカードを受け取ります。体育館入り口での検査に必要で、バッグの中身など厳しい検査が行われていました。

予選
5/23　予選開始
１試合目の台湾Ｂは棄権のため試合はなし。　　○ 20：0
5/24　予選２試合目
台湾Ａと対戦　元ナショナルチームのメンバーが２人いると聞いていましたが、1Qで3Pを二本いれられ 17 点差をつけられました。　　● 17：42

5/25　予選３試合目

　オーストラリアと対戦　1997 年のWMGオークランドで対戦した時は 31：20 で負けていましたが、今回は出だし良く快勝。　　○ 28：18

5/27　予選４試合目

　エストニアと対戦　　エストニア＃11 に3P５本、＃18 に 18 得点をいれられ完敗。

●　23：44

予選終了　日本は２勝２敗で３位。

準決勝

　予選２位のエストニアと対戦

エストニア＃11 を抑え3P１本、しかし＃18 に 15 得点。　　● 25：35

３位決定戦

　予選３位のオーストラリアと対戦

ディフェンスが機能して完勝。　　○ 30：６

銅メダル

諦めかけていたメダルは銅ですが、なにより嬉しいです。
チームでの獲得に嬉しさが数倍になります。
ご声援ありがとうございました。
次は、WMG関西 2027 に参加します。

以上

会員だより

嘘のような、本当にあった話（その９～）

元高校教諭　須田 武志

本寄稿は、滋賀県立膳所高等学校の男女バスケットボール班を長年指導された須田武志先生によるもので、前５号（初回 97 号、第２回 98 号、第３回 99 号、第４回 100 号、第５回 101 号）の続きです。（編集部注）

その９．福岡インターハイの想い出　　1974（昭和 49）年８月

あれから早半世紀が経った。昨年（2024 年）のインターハイは福岡での開催であった。

インターハイに備えての暖房練習

日本の夏の暑さは、どこに行っても格別である。特に今回のインターハイの開催地である九州の福岡は尚更である。その暑さ対策として、体育館の窓を全部閉め切って、更には暗幕を張って体育館の温度を上げ、更にその上、石油ストーブを倉庫から持ち出して体育館の温度を上げて練習。事務長に文句を言われながらも自分のカネで買った石油だから文句を言われる筋合いはないと無視して、出発直前まで暖房練習。体育館の中に入っただけでも、まるで蒸し風呂のようで自然と汗が出てくる。風が全く入ってこないので体育館の福岡インターハイに対する暑さ対策は万全だと思って福岡に向かった。

いざ、福岡に行ってみると試合会場はなんと九州電力体育館。電力会社の体育館だけあって全館が冷房している。事務長に文句を言われながら、なんのために体育館の窓を閉め、おまけに体育館に石油ストーブを持ち出して練習したのか、わからない。しかし、これも一つの経験だと思って諦めてしまえばそれまでだが・・・。

福岡インターハイ　1974（昭和 49）年８月２日～　於　九州電力体育館

一回戦	膳　所	○	７４（	３５－２５ ３９－２９	）５４	福井商
二回戦	膳　所	×	５８（	３６－２６ ２２－４３	）６９	京　北

2024年発行の月間バスケットボール８月号のP54にBリーグ横浜のキング開選手の特集記事が掲載されていた。その中に、彼の高校時代のインターハイの暑さ対策の話が出ていた。
真夏で体育館は暑いということで、練習のときに窓を閉め切って、暑さ対策をしてインターハイに臨んだという。いざ、体育館に行ってみるとエアコンが無茶苦茶効いていて、寒い体育館で試合をして不完全燃焼のまま試合が終わってしまった、と話していた。
昔も今も、どこの指導者も考えることは同じなんだなあと感心した。

昨年（2024年）の夏に、半世紀ぶりに福岡でインターハイが開催された。月日が経つのは早いものである。私はそれだけ年をとったということになる。

その10　　左手首を失った選手が入部。　1992（平成４）年４月入学

バスケットボールに限らず、スポーツの世界で勝負を争って試合に勝とうと思ったら、ある程度、身体が完全でないと勝ち目は薄くなる。ところが、４月に左手首の先がない部員が入部してきた。松野元紀である。中学時代にバスケットボールをやっていた。中学校で通用していたプレーでも、高校では、オイソレと簡単にプレーが通用するようなことはない。正直いって、勝負の世界のこと、彼をアテにしていなかった。
ところが入部した日から、彼は、毎朝はもちろん、定期考査の一週間前や定期考査中の朝でも（本当は練習をしてはいけないのだが)、１人で黙々とショット練習を繰り返していた。
これが３年間、続いたからりっぱである。丁度、私の息子と年齢が一緒であったこともあって、彼には、いつも以上に関心を持つようになった。
練習が終わって、後片付けが終わったあとも、いつも１人で遅くまで残って、黙々と個人練習（ショット練習）をしていた。彼が個人練習をしている姿をみて、一緒に個人練習をする仲間が１人、２人と増えてきた。彼１人のお蔭でチームが好循環してきた。練習のない日曜日（私は木曜日と日曜日をオフにしている）にも、彼は学校に来て１人で黙々とショット練習をしていたのだから、「アイツ、いつ勉強しているのだろう？」と不思議に思う部員もいた。
練習が終わったあとに、個人練習をしている部員には、私は絶対に「時間だから早く帰れ」とはいわないことにしている。最後の部員が体育館を去るまで、黙ってじっと残って、待っている。平日であると、大体、午後８時頃にはショット練習が終わるので、私が最後に体育館の鍵を掛けて帰ることにしている。
夏に３年生が引退したあと彼は主将に選ばれた。
ある日のことである。その日は、たしか学園祭があった日である。普段なら、午後８時頃に終わる筈の個人練習が、午後８時になっても、いっこうに終わりそうな気配がない。しばらく我慢して、彼等が個人練習を終えるのを待ったが、いっこうに終わりそうな気配がない。時計を見ると午後９時半をとうに廻っていた。私は、「練習をやめて早く帰れ」と

いうことを今まで一度もいったことがなかったので、困り果てた。さて、どうしたものか？いろいろと考えた結果、ハタと気が付いた。そうだ、学園祭で使っている『蛍の光』のテープを流してみることにした。するとどうだろう。水が引くように、彼らは体育館からスッと姿を消していった。

彼には左手首の先がないことから、右方向のドリブルは出来るのだが、左方向へのドリブルが出来ない。そこで、左へ行くときのドリブルの方法として、ディフェンスに極力背中を向けてディフェンスにくっ付きながら右手で左へドリブルをする術を教えた。

ウェートトレーニングや低鉄棒のときなどでは、左手が不自由なのに、みんなと同じように取り組んでいる。ハラハラしながら見ているこちらの方が冷や汗ものであった。

そして、迎えた３年生最後の富山インターハイ予選。

決勝の相手は瀬田工。瀬田工は前半の途中から、マンツーマンディフェンスをやめてゾーンディフェンスに切り替えてきた。このあたりが滋賀の指導者の指導力のなさであろう。マンツーマンディフェンスをやめてゾーンディフェンスで守ってきたことが瀬田工にとっては致命傷となった。この試合で、彼１人で3Pを８本も入れた。楽勝であった。

決　勝　　1994（平成６）年６月 19 日　　於　滋賀県立体育館
　　膳　所　　７３―４０　　瀬田工

優勝後の表彰式で、彼はMVPを受賞した。私は２階の観客席でこれを見ていた、思わず涙が込み上げてきた。３年間の、誰も真似出来ない彼の努力の成果が報われた瞬間でもあった。受賞は当然である。

富山インターハイでは多くの新聞社やTV各社に囲まれてしまい、島根の松江工に一回戦で負けてしまった。

インターハイ　1994（平成６）年８月２日　　於　富山
一回戦　　膳　所　　５３―５６　　松江工

＜つづく＞

訃　　報

油井　康　氏　　令和７年１月８日逝去　　享年９１

岩手県ミニバスケットボール連盟理事長、水沢市（現奥州市）バスケットボール協会会長の要職を務められ、長年にわたり岩手県のバスケットボールの普及に貢献されました。また、亡くなる直前まで現役のシニア選手として活躍され、2021 年には第 16 回日本スポーツグランプリ賞を受賞されました。
ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

訃　　報

尾崎　正敏　氏　　令和７年３月５日逝去　　享年９５

早稲田大学卒業後、ニチボー平野（後のユニチカ山崎）の監督として、1958（昭 33）年の全日本女子総合で優勝するなど、同チームの輝かしい実績を築きあげました。その後、全日本女子の監督も務められ、1974 年のアジア大会では優勝、1975 年の世界選手権では第２位の戦績を残すとともに、1999 年から２期４年にわたり日本協会の会長を務められ、日本バスケットボール界の発展に貢献されました。
ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

油井　康さんを偲んで

小澤 正博

平成 27(2015)年 10 月、代々木第二体育館で開催された「シニアバスケットボール交歓大会」に遠くの岩手県から初参加いただいた「岩手マスターズ」にプレイニング・ヘッドコーチとして活躍されていた油井さん。

ゲームが終わってから私に近寄り「あんた何年生まれ？」との質問、私が「昭和 10 年生まれ」と答えるとすぐに「じゃー生まれた月は？」曰く「８月」、それでは「８月の何日よ？」しつこいなとも思ったが「21 日」と答えたところ、「あなたとは生年月日が一緒だよ」と油井さんから言われてビックリ。

ここからモーゼなる油井さんとの緊密なお付き合いが始まったことは言うまでもない。司法書士をしておられた油井さんらしく「それじゃあ免許証を見せ合おうよ」とも。

その後すぐ振興会に入会され、以降毎年振興会が主催する「シニアバスケットボール交歓大会 In Yoyogi」に出場されてきた。同時に 2003 年から全国あちこちで開催されているシニア大会にも率先して参加され、「岩手マスターズ」のチームヘッドコーチとともに試合の後半最後になると３分間出場を貫いてこられた油井さんの訃報に接し深い悲しみが私を襲った。

お互いに「札幌の在間さんを見習ってこれから先も当分の間バスケットを続けようね」と約束していたのに油井さんが勝手に旅立つなんてルール違反だよ。

油井さんのリーダーシップとお人柄のおかげと思うが、岩手マスターズが東北地方のシニアバスケットボールの頂点として、変わらぬバスケットボール愛を貫いてこられたことは明白であり、称賛の拍手を贈りたい。

振興会に入られてからも毎年開催される総会に、その都度、水沢から上京の上出席され、ご自分の職業柄からか貴重なご意見を述べられていたことが懐かしい。

油井さんは令和２(2020)年ご自分の自叙伝「落書」を出版されている。それによればバスケットボールを始められたのは水沢高校時代で、当時山形県酒田で開催されたインターハイに出場されている。以来 70 有余年バスケットボールを続けてこられたが、80 歳代の高齢でこの競技を続けることは一般的には困難を極める。にもかかわらずチームリーダーとともにシニアの試合に選手として出場されるには相当のトレーニングを積み重ねてこられたことと推測するが、自叙伝にはトレーニングの話はない。ここでも油井さんがいかに努力家であったかがうかがえる。

その努力の甲斐あってのことと思うが、2021 年には日本スポーツグランプリ賞を受賞され、シニアバスケットの発展にも大いに貢献された。

油井さんはバスケットボール以外でも、スキーや登山にいそしんでおられたようだが、スキーではイタリアアルプスを滑降されるなど、バスケ以外のスポーツにも果敢に挑戦されて人生を楽しんできたようにも思える。

誕生日が同日というめったにないバスケット狂同士が、シニア大会でマッチアップする日はもうないと思うと自然と涙が溢れる。油井さん勝手に先走っちゃーだめだよ。

今となってはご冥福を祈るしかなす術がない。　合掌

［振興会副会長］

尾崎正敏さんを偲んで

蒲田　尚史

尾崎正敏さんが本年３月５日に亡くなられた。享年 95。1931 年岡山県生まれ。岡山操山高校から早稲田大学に進学、卒業後 1956 年からはニチボー平野（後のユニチカ山崎）の監督に就任、1958 年の全日本女子総合での優勝を始め、その後の同チームの輝かしい歴史を作ってきた名将である。

全日本女子の監督も務め、1974 年のアジア大会で優勝、1975 年の世界選手権では第２位の戦績を収めている。1999 年からは２期４年にわたり、日本協会の会長も務められた。（詳細は、高校籠球ふるさと記―大阪府編プラザ 87 号、―岡山県編プラザ 92 号に掲載）

1956 年からはニチボー平野（後のユニチカ山崎）の監督に就任、1958 年の全日本女子総合での優勝を始め、その後の同チームの輝かしい歴史を作ってきた名将である。

全日本女子の監督も務め、1974 年のアジア大会で優勝、1975 年の世界選手権では第２位の戦績を収めている。1999 年からは２期４年にわたり、日本協会の会長も務められた。（詳細は、高校籠球ふるさと記―大阪府編プラザ 87 号、―岡山県編プラザ 92 号に掲載）

その功績については、バスケット人なら誰もが認めるところであり、まさに「巨星墜つ」と言っても過言ではない。

小生にとっては、個人的に大変お世話になった方で、そのことは 18 年前のプラザ 33 号の「会員だより」で触れさせて頂いたが、できるだけ重複を避けつつ、それに触れることで尾崎さんへのお弔いの言葉とさせて頂きたい。

小生、兵庫県代表の神戸高校メンバーとして出場した 1965 年の長崎インターハイ準々決勝、神奈川県代表の慶応高校に１点差で逆転負けした悔しさを大学バスケットで晴らそうと早稲田大進学を目指したが、家庭の事情で断念、地元の大学に進学するもバスケットに対する情熱が失せかけていた。そんな中、大学１年の冬休み、知人の紹介でニチボー平野の練習に個人参加させて頂き、尾崎さんに初めてお会いした。コートには、当時の全日本女子を代表する平野の選手だけではなく、甲南大学や近畿大学といった関西一部の男子選手が、練習に参加しており、これにも驚いたが、フリースローの練習では、女子全選手が「あたりまえです」と言い乍ら、２本きっちりと決めていたのが忘れられない。そんなことに触発されたのか、大学１年の終わりから部活に参加、その後、色々とご指導頂く中、４年の秋には、ユニチカ山崎と練習ゲームまでさせて頂いた。僅差で敗れたのは仕方ないが、それが全国紙に掲載され、赤恥をかいたのも懐かしい思い出である。

もし尾崎さんにお会いすることがなければ、多くのバスケット人に出会うこともなかったと思うと、尾崎さんへの感謝の気持ちでいっぱいである。

尾崎さん本当に有難うございました。　　合掌。

［振興会副理事長］

事務局だより

［事務局］

◇生前から交流のあった故神戸大学野村治夫名誉教授が収集した歴史的に貴重な資料を「神田バスケットボール資料室」に寄贈していただきました。関西地方のバスケットの歴史を知ることができる貴重な資料が多く、整理した後「野村治夫文庫」として保管する予定です。（今般、故野村治夫名誉教授の収集した資料を整理し送付していただいた神戸大学OB山口敬様に感謝申し上げます。）

◇５月 18 日、「一般社団法人京都府バスケットボール協会設立 100 周年記念祝賀会」（会長福山哲郎氏）が京都駅近くのホテルで 300 人近くの出席により盛大に開催されました。京都府協会は、JBAより５年早い 1925 年に設立された最も歴史のある地方協会です。100 年の歴史は、現在の協会の役員の皆さんの活動につながる伝統になっています。

◇年会費納入のお願い

令和７年度も第１四半期が過ぎました。
振興会の活動は会員の皆さまの会費によって支えられております。
会費納入につき、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

＜年会費＞

男性会員：１万円、女性会員：５千円　　（法人会員：５万円）
（月刊バスケットボール購読の方は、上記金額プラス４千円）

＜振込口座＞

〇ゆうちょ銀行　　００１００－３－３１６０３５
　　ＮＰＯ法人日本バスケットボール振興会

〇三菱ＵＦＪ銀行　神保町支店　　普通預金口座　１６８４７４３
　　特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

〇みずほ銀行　　丸の内中央支店　普通預金口座　１００４６８７
　　特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

◇新入会員（含む法人会員）ご紹介のお願い

会員の高齢化などにより、会員数が年々減少しています。是非とも会員の皆さまからの個人会員、法人会員のご紹介をお願い申し上げます。
入会方法は、当会ホームページ右上にある「会員募集中」のボタンをクリックしていただくと確認することができます。
（入会手続きは事務局にて対応させていただきますので、事務局宛に直接、「入会希望者名、連絡先」をご連絡いただく方法でも構いません。）

以上

記事の訂正とお詫び

「第 16 回シニアバスケットボール交歓大会 2025 in Yoyogi」開催曜日の誤り
プラザ 101 号 14 頁でご案内した掲題大会の開催曜日に誤りがありましたのでお詫びの上訂正させていただきます。正しくは以下の曜日となります。

（誤）2025 年 10 月 29 日（木）、30 日（金）　代々木第二体育館
（正）2025 年 10 月 29 日（水）、30 日（木）　代々木第二体育館

プラザ　こぼればなし

◇バスケットボール女子Wリーグは、外国籍選手の条件撤廃を発表した。1967（昭 42）年、第 1 回日本リーグ（Wリーグの前身）のスタート当時は外国人に関する制限はなかったが、コート上２名あるいは１名の時代を経て、1993（平５）年に外国籍選手は登録が不可になった。JBL、WJBL と組織母体は変わったが、2003（平 15）年、帰化選手を前提に登録を可能とし、その後「通算５年以上日本に在留すること」を条件に外国籍選手の登録を認めていた。
『世界最高峰の競技力に挑戦し続ける姿勢で「世界中の目標となるリーグ」へ』というリーグのビジョンを実現し、日本女子バスケットボールの強化・発展につなげていくことを目標としている。

◇本誌の「高校籠球ふるさと記」で各県の歴史に触れているが、インターハイの起源は、戦前に全国中等学校籠球選手権大会として開催されていたものである。戦後の学制改革に伴い 1948（昭 23）年から全国高等学校バスケットボール選手権大会（インターハイ）の名で国民体育大会として開催、1951（昭 26）年に国民体育大会から独立している。

◇戦前の学制で、義務教育の尋常小学校(６年)を卒業すると、小学校高等科、中等学校、専門学校（実業学校）へ進みます。中等学校には中学校（男子)、高等女学校（女子)、専門学校には商業、工業、実業などがありました。旧制中学卒業資格で旧制高等学校、高等専門学校へ進めます。本文記事に、回顧記事が多いです。ご参照ください

以上

NPO法人
日本バスケットボール振興会
〒101―0051
東京都千代田区神田神保町2－20
新協ビル 304 号室
電話／FAX（03）5276－5801
メール contact@jbbs.jp